

たかが席替え されど席替え

「先生、どうやって席を決めているの？」ある日、担任していた六年の児童が聞いたことがある。

「みんなの名前を書いた紙を、こっやって手のひらに乗せて、ふうつと息で飛ばすの。散らばった名前を見て決めるの」

担任を勤めていた頃、児童の席は必ず担任自ら決めていた。児童に話し合わせたり、くじで決める教員の話も聞くが、決して児童に決めさせるようなことはしなかった。

席替えは一カ月に一回月初めに実施していた。児童にとって、月初めの朝登校して黒板に貼られた座席表を見るのが胸がわくわくする瞬間でもあり、落胆を誘うドキドキする瞬間でもあったようだ。決める側の担任にとっては、その月の学級経営の方針と併せてテーマをもって臨んでいた。

算数の難しい単元が計画されている月には、理解に手間取る児童を一番前の席に並べ、一斉指導をしながら、平

た。学期初めや学期末の授業日数の少ない月には、ちょっと冒険して変わった席替えも試みた。偏食傾向の児童で班を編制し、一緒に給食を食べながら食物の話をさりげなく伝えたこともある。男子ばかりの班があったり、一人だけ女子が入っていたり、男女同数にもこだわらなかった。

「世の中って結構不平等なものだよ」と話すと妙に納得していた。

教育随想



緑区 原山小学校校長

竹下 晨子

リーダーばかりで班を編制したら自己主張が強くなかなか意見がまとまらない、逆にいつもリードされているような児童だけの班は、その中でリーダーらしき立場の児童が育ち、なごやかに話し合いをすすめることができるなど、児童のいろいろな面を新たに発見することも多かった。

児童にはよくこう話した。

「人間には自分と合う人も合わない人もいる。好きでない人と一緒になることがあっても人生の中でそういうことはいくらでもある。一カ月経てば、また席替えがあるのだから我慢しなさい。合わないと思っても案外そうではなかったりすることもある」

しかし、失敗もある。低学年の学級で一人の男子児童がいつもある女子児童をいじめるので、隣同士で並ばせて仲良くすることの大切さを教えようと考えたことがある。ところが、机の下で見えないように蹴るなどの嫌がらせが止まない。彼が好ましく感じているらしい児童の隣の席に替えたところ優しい柔和な表情で生活するようになり、件の女子児童への嫌がらせもしなくなったのである。

「たかが席替えであるが、されど席替えである」児童にとっては、席替えは最大の関心事であるが、すべての児童が満足するように席を決めることなどできない。

「たかが〇〇であるなかれ」清掃・給食・休み時間等々、授業以外の教育活動は様々あるが、教師はすることのすべてに教育的な意図をもって当たってほしい。

(たけした あきこ)